日本農業新聞　2021年(令和3年)9月9日(木曜日)

前年度比8%減
女性の死亡事故は増
20年度農作業事故

北海道農作業安全運動推進本部は、2020年度の農作業事故報告書をまとめた。負傷と死亡を合わせた件数は2113件と、前年度より184件（8%）減少した。女性の死亡事故は6件と、死亡事故件数の37・5%を占め、過去10年では11年度の7件以来の多さになった。高齢者が事故に遭う割合も高く、同本部は「家族や地域が一体となり、農作業安全運動に取り組んでいくことも極めて重要」と強調している。

負傷事故はここ数年、2100～2200件台だったが、20年度は前年度を181件下回る2097件と減少。17年度から連続して前年度を上回っていた死亡事故は、前年度を3件下回る16件だった。

死亡事故の75%、負傷事故の37・5%がそれぞれ60歳以上で占めた。死亡、負傷事故とも春の作業期と秋の収穫期に多い。同本部は「高齢者の事故をなくすため、機械の改良や作業方法の改善などが必要」と指摘する。

■注意喚起の徹底を

死亡事故の75%に当たる12件が農業機械によるもので、3件が高所転落だった。農業機械ではトラクターによる6件が最も多く、そのうちの3件が転倒・転落で事故に遭った。

発生場所は畑が5件、敷地内が3件、公道と畜舎が各2件など。過去10年の発生時間は、午前10時台と午後2時台が多い。

女性の死亡事故6件は農業機械によるもので、農業機械事故の半数を占めた。60歳以上が5件あり、発生場所は敷地内や公道、畑。女性の死亡事故は11年度の7件以来、1～4件で推移してきた。

同本部は、補助作業者を伴う農業機械の作業は、機械の発進や停止の合図、周囲からの声掛けなどを行うとともに注意喚起の徹底が必要――と指摘する。

■負傷、家畜関連多く

負傷事故は家畜によるものが798件（38・1%）と最も多く、農業機械が617件（29・4%）、人の転倒が194件（9・3%）など。

過去10年では、家畜による事故が農業機械の事故を上回っている。発生場所は畜舎が4割を占め、牛との接触事故が多い。搾乳や搾乳前後に牛を移動する際の事故が多いという。

圃場（ほじょう）と敷地内の負傷事故はそれぞれ2割あり、農業機械ではトラクターの操作中に事故に遭う例が多い。過去10年の発生時間は午前10時台が最も多く、午前11時台、午後4時台などと続く。

■地域一体で防止

同本部は道や市町村、JAなどと連携し、事故防止に取り組んでいる。農作業の事故を減らすためには、農業者の安全意識の自己啓発や機械利用技術の向上、健康管理などが不可欠としたうえで、家族や地域が一体になって取り組んでいくことも重要としている。

家畜の事故が多いことから、同本部は網走農業改良普及センターと連携し、酪農や畜産に携わる人向けのパンフレット「家畜労働安全のすすめ」を使い、事故を減らす取り組みに力を入れている。